

氏名	服部 ユカリ (ハットリ ユカリ)
本籍	島根県
学位の種類	博士(老年学)
学位の番号	博甲第94号
学位授与の日付	2020年3月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能向上プログラムの開発

論文審査委員	(主査)	桜美林大学教授	渡辺 修一郎
	(副査)	桜美林大学教授	長田 久雄
		桜美林大学教授	芳賀 博
		佐久大学教授	堀内 ふき

論文審査報告書

論文目次

第1章 序章	
1. はじめに	・・・ 1
2. 用語の定義	・・・ 3
第2章 本研究の目的と意義	
1. 目的	・・・ 4

2.	意義	・・・	4
3.	研究の構成	・・・	4
第3章 研究1「地域在住高齢者の写真に関する実態の解明」			
1.	目的	・・・	5
2.	研究デザイン	・・・	5
3.	対象	・・・	5
4.	方法	・・・	5
5.	結果	・・・	6
6.	考察	・・・	8
第4章 研究2「介護予防教室に導入したフォトボイスの効果 －参加者の Focus Group Interview から－」			
1.	目的	・・・	9
2.	研究デザイン	・・・	9
3.	対象	・・・	9
4.	方法	・・・	9
5.	結果	・・・	11
6.	考察	・・・	11
第5章 研究3 「フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能の 維持・向上をめざす介護予防プログラムの開発」			
1.	目的	・・・	13
2.	研究デザイン	・・・	13
3.	対象	・・・	13
4.	方法	・・・	13
5.	結果	・・・	19
6.	考察	・・・	22
7.	研究の課題	・・・	25
第6章 総括			
		・・・	26
	参考文献		30
	図表		

論文要旨

従来の介護予防プログラムは、生活機能のうち心身機能の要素に焦点を当てたものが多く、活動や参加への働きかけが十分ではなく、住民が主体的に自主的に継続して活動できるプログラムの開発が求められている。本研究は、撮影した写真と語りから問題解決の行動を促す手法であるフォトボイスが、自己決定能力を高め、注意分割機能や計画力を刺激する要素を含むことに着目し、フォトボイスを用いて地域在住高齢者がエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながる介護予防プログラムを開発することを目的とした。

研究 1 では、地域在住高齢者の写真撮影機器保有、写真鑑賞の嗜好性、写真撮影行動に関する実態を 169 人に対する自記式質問紙調査にて明らかにした。高齢者は写真鑑賞を好み、9 割以上がカメラ機器を所有し、6 割以上に写真撮影の習慣があること、写真撮影をする者は、知的能動性・社会的交流が高く、性・年齢には関係しないことなどを明らかにし、介護予防プログラムに写真を媒体として用いることの有用性を確認した。

次いで研究 2 において、フォトボイスの手法を導入した介護予防教室の効果について、参加者 7 人にフォーカスグループインタビュー(FGI)を実施し、質的統合法(KJ 法)で分析した。『相互理解』『自己理解』という自身の客体視と課題の意識化というエンパワメントのプロセスと『視野と行動の拡大』という生活機能への波及効果が明らかになり、フォトボイスプログラムは、エンパワメントや生活機能向上をもたらす有用性を示した。

研究 3 では、研究 1・2 の結果をもとに、フォトボイスを用いた介護予防プログラムを開発し、ランダム化比較試験により効果を評価した。地域在住高齢者をフォトボイス群と講話群に無作為に割り付け、フォトボイス群には 5～6 人を 1 グループとしたフォトボイスプログラムを、講話群には健康講話を 8 回実施した。フォトボイス群 23 人、講話群 28 人について分析した。プロセス評価では、フォトボイス群は講話と同様に出席率・満足度ともに高かった。影響評価では、認知機能の主観的変化が講話群では悪化したのに対し、フォトボイス群では有意に維持されていた。毎回出席者フォトボイス群 10 人、講話群 17 人について同様の分析を行った結果も同様であった。毎回出席者では、歩行意欲時間が、フォトボイス群で有意に上昇した。質的調査でも、『交流の成果』『問題意識の深化』『内なる力の変化』というエンパワメントがフォトボイス群に生じていることが明らかになった。結果評価では、質的な調査により『生活への活用』『地域社会への活用』などの参加や活動への波及が見られ、生活機能の向上が示された。

以上から、今回開発したフォトボイスを用いた介護予防プログラムは、地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながることを確認された。専門家の知識伝達や指導ではなく、参加者の相互作用により、当事者自身が望ましいと思う活動を認識し選択することを促す意義があり、新しい介護予防プログラムとして貢献できるものと考えられた。

論文審査要旨

本研究は、写真と語りから問題解決の行動を促す手法であるフォトボイスが、自己決定能力を高め、注意分割機能や計画力を刺激する要素を含むことに注目し、フォトボイスを用いた高齢者の生活機能向上プログラムを開発することを目的とする。研究 1 では、地域在住高齢者 169 名を対象として写真に関する実態調査を行い、9 割以上がカメラ機器を有し、6 割以上に写真撮影の習慣があること、写真撮影をする者は、知的能動性・社会的交流が高く、性・年齢には関係しないことなどを明らかにし、介護予防プログラムに写真を媒体として用いることの有用性を確認した。次いで研究 2 では、フォトボイスを導入した介護予防教室の効果について 7 名を対象としたフォーカスグループインタビューを行い KJ 法にて分析した。相互理解、自己理解という自身の客体視と課題の意識化というエンパワメントのプロセス、視野と行動の拡大という生活機能への波及効果が明らかになり、フォトボイスが、エンパワメントや生活機能向上をもたらす有用性を示した。研究 3 ではフォトボイスを用いた介護予防プログラムを開発し、その効果を、フォトボイス群 23 人、講話群 28 人を対象とした無作為化比較試験により検討した。フォトボイス群は講話と同様に出席率・満足度ともに高く、影響評価では、主観的認知機能が講話群では悪化したのに対し、フォトボイス群では有意に維持されていた。また、毎回出席者では、歩行意欲時間が、フォトボイス群で有意に上昇した。質的調査では、交流の成果、問題意識の深化、内なる力の変化というエンパワメントがフォトボイス群に生じていることが明らかになった。結果評価では、生活への活用、地域社会への活用などの参加や活動への波及効果が示された。

これら一連の研究は、十分な国内外の先行研究の検討をもとに、適切な方法にて分析されており、研究の目的と意義、信頼性、独創性において博士論文として十分な水準にあるものと判断し、合格と判定した。

口頭審査要旨

公開審査では、30 分間の論文概要の発表後、30 分間にわたり質疑応答が行われた。本プログラムと回想法との相違については、フォトボイスでは主体的に撮影するという自己決定を促す点の優位性が示された。クロスオーバートライアルの研究方法をとっているが、後半のデータを分析に用いていない点については、本研究では無作為化比較試験が有する倫理的な問題を解決するため、対象へのサービスの観点でクロスオーバートライアルを実施したこと、介入の効果が対象入替後も継続する可能性があることなどから分析は行っていないことが説明された。今後の研究の発展性については、本研究でのフォトボイスの効果検討は約 50 日間という介入期間で行ったものであり、生活機能指標など年単位で変化する指標について長期効果を検討すること、本プログラムは世代間交流にも活用できる可能性があることから世代間交流の促進効果を検討すること、プログラ

ムのマニュアル化などによる普及などの方向性が示された。その他の質問それぞれについても的確な説明がなされた。

主査・副査による審査では、論文の枠組み、先行研究のレビュー、意義と目的、新規性、研究方法の正確性と結果および考察の信頼性および妥当性が吟味された。新規性では、フォトボイスという新しい介入方法の開発がとくに評価された。今回開発したフォトボイスを用いた介護予防プログラムは、専門家の知識伝達や指導ではなく、参加者の相互作用により、当事者自身が望ましいと思う活動を認識し選択することを促す意義のある新しい介護予防プログラムとして貢献できるものと評価された。

以上により本論文は、博士論文として十分な水準にあるものと、主査および副査全員が合格と判定した。